

鹿児島県立短期大学紀要 第63号 2012年12月26日発行

人文・社会科学篇 抜刷

初対面会話における「同意要求－応答」の連鎖の分析
－共感構築の観点から－

An Analysis of “Agreement Request-Response”
Sequences in Chinese and Japanese Conversations:
From an “Empathy-Constructing” Viewpoint

楊 虹
YANG Hong

初対面会話における「同意要求―応答」の連鎖の分析 ―共感構築の観点から―

An Analysis of “Agreement request- response” Sequences in Chinese and Japanese Conversations: From an “Empathy- Constructing” Viewpoint

鹿児島県立短期大学 楊 虹

キーワード：中日接触場面 中日対照 中国人学習者 モダリティ

1. はじめに

初対面の会話では、会話の参加者たちは、お互いをよりよく知りあうために共通点を探し情報交換を積極的に行う。そのため情報要求の質問が多くみられる。一方で、情報交換がある程度進んだ場面で、参加者間でより親密度の高い会話を行うには、聞き手を自らの認識域に引き入れながら意見や感想を述べる同意要求の発話が用いられ、参加者間の共通認識や共通の感覚を確認しあい構築していくプロセスもみられる。前者を会話の情報交換的側面とすれば、後者は会話の共感構築的側面である。

佐々木（2006）では、友人同士の2者間会話にみられる体験談を分析した結果、会話の参加者たちは、出来事をくり返したり評価や感想をくり返したりすることによって、共感や一体感を構築していると述べている。また、佐々木（2010）では、友人同士の2者間会話で中国人日本語学習者と日本語母語話者による体験談を同じく友人同士の日本語母語場面と比較した。佐々木（2010）によれば、接触場面では、中国人学習者には共感を示す評価表現が少ないため、体験談の終結部が短く、共感を示すことより会話を進めることを優先した会話展開となっている。佐々木（2010）は、体験談における共感構築のプロセスの有無は会話参加者の所属する言語文化や会話のスタイルの影響を受けると指摘し、今後の中国語母語場面の研究が待たれると述べている。

楊（2011a）では、問いかけ性を持つ「質問」を機能で分類し、中、日それぞれの母語場面を比較分析した結果、いずれも情報要求をする質問が最も多くみられたが、中国語母語場面では、情報要求の機能を持つ質問の割合が日本語母語場面より高く、反対に日本語母語場面では、確認・同意要求の機能を持つ発話が中国語母語場面より多くみられ、なかでも聞き手に話し手の意見や評価的発話に同意・同調をもとめる同意要求発話の出現頻度に大きな差がみられたと報告している。すなわち、中国語母語場面の初対面会話では情報要求の質問が圧倒的に多いのに対し、日本語母語場面では同意要求の発話も多くみられ、共感構築的側面が初対面会話でもみられるということが考えられる。

本研究は、同意要求発話は、話し手の認識を断定的に述べるのではなく、聞き手を話し手の

認識域に引き入れ、話し手の認識を聞き手と共有するもので、上述の会話の共感構築的側面を表すものと捉える。楊 (2011a) は中、日母語場面の初対面会話における同意要求の発話頻度の差を指摘しているが、同意要求に対する応答を含む発話の連鎖の分析はしておらず、会話の参加者がどのように「同意要求—応答」のやり取りを通して共感を構築しているかについては、明らかになっていない。そこで、本研究では、中国語母語場面と日本語母語場面、中日接触場面にみられる同意要求とそれに対する応答発話を含む「同意要求—応答」の連鎖を分析し、それぞれの初対面会話における共感構築の一端を明らかにする。また、中、日両母語場面の比較を行うことにより、両母語場面の共感構築の連鎖の異なる傾向を示したうえで、中国人日本語学習者が参加する中日接触場面の会話を考察し、中国人日本語学習者への会話指導に示唆を得たいと考える。

2. 先行研究および本研究の目的

2.1 先行研究

日本語の会話においては、「だろう」「じゃないか」「よね」が共通認識の喚起・確認機能を持つと指摘されている (蓮沼 1995)。蓮沼 (1995) は、この三つの形式はニュアンスの相違が認められるが、「自分と同様な認識をもつように聞き手を促し、その成立状態を確認するといった共通の働きを」するものであると述べている。また、共通認識の喚起の対象となる知識・情報は、「発話現場にある対象についての視覚的な認知」や、「話し手・聞き手の共有する過去の経験の中の要素」、「一般通念」など、いずれも「聞き手も自分と同様な認識ができるという肯定的な見込みに立ち、それを共有するよう聞き手をいざな」うものだとしている。

また、宮崎 (2002) は疑問のモダリティとして、確認要求の機能をもつ日本語の言語形式の体系的な記述を試み、同じ確認要求の機能を持つ「のではないか」「だろう」「よね」「ね」の共通点と相違点の整理をした。宮崎 (2002) によれば、「のではないか」は、話し手が判断を形成しつつある状態を聞き手に見せることによって、間接的に聞き手の関与をもとめるが、「だろう」は聞き手の認識内容を確認の対象としている。また、終助詞の「よね」と「ね」については、「よね」は話し手の判断が事実と合致しているかを確認する用法および常識に属する事柄を確認する用法があり、「ね」は「話し手の認識を聞き手に提示し、そのように認識することについて聞き手の承認を求める」機能があるが、「相手に応答をもとめる働きが弱い」と述べている。

一方、中国語においても、「吧」の確認要求機能についての研究 (胡 1981, 木村・森山 1991, 邵 1999, 王 1999, 黄 2009) や、認識のモダリティとしての「吧」と「だろう」の対照研究 (呉 2002), 「ではないか」と「不 (是)・・・吗」の比較 (劉 2009) 等がみられる。これらの研究では、それぞれ分析の切り口が異なるが、中国語の「吧」、「不 (是)・・・吗」は聞き手との共通認識を喚起・確認する働きを有するという共通した指摘がみられる。

以上の先行研究から、本研究では、日本語では「だろう (でしょう)」「・・・ないか (では/じゃないか)」「よね」、中国語では、「吧」、「不 (是)・・・吗」を付加する発話を確認要求の機能を

持つ言語形式とする。相手に応答を求める働きが弱い「ね」については、対象としない。

確認要求の発話の確認の対象となる内容は①客観的な事実や情報、②主観的意見・評価にわかれると考える。①客観的な事実の確認は、情報交換のやり取りでよくみられ¹、また初対面会話のやり取りに意味交渉が起こるために確認要求の頻度も高く、会話の情報交換的側面が強いため、本研究の目的から、分析対象としない。そこで、本研究は、確認要求のうち、②主観的意見・評価が確認の対象となる発話を「同意要求」として、分析の対象とする。

2.2 本研究の目的

本研究では、中、日それぞれの母語場面及び中日接触場面の初対面会話における「同意要求—応答」の連鎖の特徴の分析を通して、両言語の母語場面の共感構築の特徴を明らかにしたうえで、接触場面の会話を考察し、中国人日本語学習者の会話指導への示唆を得ることを目的として、以下2つの課題を立てて分析を行う。

課題

- 1 同意要求に対する応答にはどのようなパターンがみられるか。
- 2 中、日母語場面と接触場面の「同意要求—応答」のパターンの出現傾向に違いがみられるか。

3. データおよび分析方法

中国語母語場面と日本語母語場面、中日接触場面それぞれ18組の2者間の初対面会話の録音・録画をデータに用いる。調査協力者は全員女性である。中国語母語場面と接触場面は中国、日本語母語場面は日本国内の大学で収集したものである。母語場面の会話の参加者は18歳～29歳の大学生・大学院生である。ペア内の参加者の学年差は一学年以内である。接触場面の会話参加者は中国の大学に留学している日本人留学生と日本語を専攻する中国人大学生（中上級学習者）である。日本人留学生の年齢は2人を除いて、29歳以下である。

すべてのデータ収集において、参加者には、「20分ぐらい自由にしゃべってください」という指示のみで、研究目的を明かさなかった。また収録時、調査者は席をはずした。会話の冒頭から20分までの文字化資料を分析対象とし、音声及び映像を補助資料とした。

分析方法としては、まず同意要求の発話を認定し、次に同意要求に続く聞き手の応答発話を認定する。同意要求の発話を含むターンと応答の発話を含むターンを「同意要求—応答」の連鎖と認定する。例1では、網掛けの部分は、同意要求の発話で、「だめですね」は応答の発話であり、→は応答のターンを示す。□で囲っている部分（302—303）は「同意要求—応答」の連鎖である。

1 たとえば、「これは君のペンですよ」のような確認要求の発話。

例 1² 「同意要求—応答」の区分

302	かなこ	2 時間あれば行きますね 大変 でも新幹線だと自由席でも混雑とか立ち乗りの覚悟をすればとりあえず誰でも乗れますけど 飛行機は取らなきゃだめですよ
→303	みか	だめですね
304	かなこ	その日思い立ってとかというもの

本研究では、楊 (2011a) を踏襲し、聞き手に話し手の意見や評価的発話に同意・同調をもとめる発話を同意要求とする。また、楊 (2011a) では言語形式を明確に規定していないが、本研究では、日本語の場合は「じゃ (では) ないか」、「よね」、「でしょう (だろう)」, 中国語の場合は「吧」、「不 (是)・・・吗」のような疑問または確認を求める言語形式が用いられる発話であると規定する。課題 1 については、同意要求に対する応答の発話機能から、応答のパターンを分類する。課題 2 については、中国語母語場面と日本語母語場面、中日接触場面における各パターンの生起頻度をもとめ、比較する。

4. 結果および考察

4.1 結果

4.1.1 同意要求に対する応答のパターン

分析の結果、同意要求に対する応答には、明らかに否定する応答もみられたが、ほとんどの応答は同意要求発話を受け入れ、同意を示すものである。同意要求に対して、明らかに否定する応答は、主に会話例 1 のような相手のほめに対する否定である。会話例 1 では 106 さおりの「お琴 お花 着付け 名門じゃないですか」という同意要求に 107 かえは「いやそんなことないです」と否定した応答をしている。

会話例 1

- 106 さおり お琴 お花 着付け 名門じゃないですか [なんか
→107 かえ [hhhh いやそんなことないです
なんか服飾のほうなので【以下略】

同意を示すパターンはさらに、①先取り・共話、②情報・評価の提供、③類似した同意要求、④語彙・表現等の繰り返し、⑤情報要求、⑥応答詞・相づちのみ、という 6 つの下位分類がみられた。以下ではそれぞれの会話例をあげながらこの 6 つのパターンの特徴を述べる。紙幅の関係で、ここではすべてのパターンがみられた日本語母語場面の会話例のみをあげる。

2 本研究では、発話者はすべて仮名である。

① 先取り・共話

先取り・共話は相手の同意要求に素早く同意を示す応答のパターンである。相手の認識に単に同意・同調を示すだけではなく、相手が言おうとしたことを予測しそれを引き継ぐ発話をして、強い共感を示すものである。先取りでありながら、情報や評価発話の提供でもある場合も、このパターンに分類される。

会話例2では、81でさつきが卒論を書くための資料収集が大変であることを説明している。それに対して、みずほは「そのほうがやりやすすくないですか」と同意要求の発話をし、間をおかずにその理由を述べ始めた(82)。実際にみずほの「やりやすい」と思う理由の発話は続く83のさつきの先取りの発話で完成される。ここでは2人の参加者が一つの発話を完成する共話が行われた。

会話例2

- 81 さつき 【前略 概要：論文を書くのに参考資料が少なく困っている】
なんかマイナーなので本も少なくて 結構大変なんですけど＝
- 82 みずほ ＝あ：でもそのほうがやりやすすくないですか なんか多いといろいろその
人が＝
- 83 さつき ＝説がいろいろあるからhhhh
- 84 みずほ うんなんか理解しないといけないからあまり少ないほうが自分の意見なん
か言えそう

② 情報・評価の提供

情報・評価の提供は、相手の同意要求発話に関連した情報または評価を提供する応答発話がみられたパターンである。このパターンは相手の同意要求の発話内容をサポートする情報または評価を提供するものであり、①先取り・共話と同様に即座に理解と共感を示すパターンである。情報・評価の発話とともに、応答詞または相づち、先行発話の繰り返しが見られる場合もあるが、このパターンに分類される。

会話例3では、41でちえこが「ファッションとかいうとフランスって感じ」という認識を「じゃないか」を付加して同意要求の発話をした。これに対して、のりこはすかさず「パリ パリ」とフランスの首都パリを持ち出し(42)、ちえこの主張に理解を示した。

会話例3

- 41 ちえこ あ やっぱりファッションとかいうとフランスって感じじゃないですか
- 42 のりこ あ パリ パリ
- 43 ちえこ パリ (.) みたい なんかたぶんそういうことだと思んですけど
- 44 のりこ あ： 大変ですね

③ 類似した同意要求

類似した同意要求は、同様の意見・主張と思われる同意要求発話をする事で相手の意見に同意を示す応答をするパターンである。同意要求をする発話のほか、応答詞や相づちがみられる場合もある。このパターンは、語彙や表現を変え類似した同意要求をすることによって、相手の認識域に入り込み、さらになんらかの要素を追加してターンを相手に返すものである。同意要求発話が連続して現れることにより長い連鎖が作られ、話し手と聞き手が「同意要求—応答（同意要求）—応答」で同じ認識や感覚を示しあい、共感を構築していくプロセスがみられる。

会話例 4 では、授業のことを「ちょう眠いよね」と同意要求をした 98 りかの発話に対して、99 でみほは「ね：：」と肯定的に受け入れた後、「つまらないよね」と授業に対する評価を「眠い」から「つまらない」に格上げして示した。応答発話が同意要求発話でもあるため、次の「つまらないよ：ね：」という新たな応答発話を引き出し、より長い連鎖がみられた。

会話例 4

- 96 りか そうだからそれで一応取っているけど
 97 みほ うんうん
 98 りか ちょう眠いよね
 →99 みほ ね：： つまらないよね 言っちゃいけないけどさ： hhh
 →100 りか つまんないよ：ね： なんかぐら：： 私ぐらいかしら
 101 みほ うん

④ 語彙・表現等の繰り返し

語彙・表現等の繰り返しは、相手の同意要求発話を含むターンに現れた語彙・表現、または同意要求発話そのものを繰り返すことによって、肯定的な応答をするパターンである。

前掲の会話例 4 では、100 りかの応答はこれにあたる³。ここでは、99 みほの「つまらないよね」を受け、りかはそれを繰り返して応答している。

また、会話例 5 では、かなこは飛行機で帰省する場合は予約を取らなければならないということを「飛行機は取らなきゃだめですよ」と同意要求の発話をした (302)。それに対し、みかは「だめですね」と相手が使った語彙「だめ」を繰り返して応答している (303)。

会話例 5 (前掲例 1)

- 302 かなこ 2 時間あれば行きますね 大変 でも新幹線だと自由席でも混雑とか立ち
 乗りの覚悟をすればとりあえず誰でも乗れますけど 飛行機は取らなきゃ
 だめですよ

³ ただし、ここでは、同じターンの次の発話「なんかぐら：： 私ぐらいかしら」は新たな情報・評価の提供であるため、100 りかの応答は、②情報・評価の提供に分類される。

→303 みか だめですね

304 かなこ その日思い立ってとかというもの

⑤ 情報要求

情報要求は、相手の同意要求に対して、関連する情報要求をするパターンである。このパターンでは相手の同意要求に対して、同意を示す相づちがみられる場合もあれば、同意を示す相づちが見られずに直接情報要求をする場合もある。①～④と比べ、同意および共感を示すことよりも、会話の内容によりフォーカスしたものとなる。

会話例6では、専攻が異なるふみとかなは同じく4年生で、卒論の話をしている。ふみの「なかなか書けないですよ」という同意要求(183)に対して、かなは相づちを打ち、相手に卒論を書き始まっているかどうか質問し、情報要求をした。

会話例6

183 ふみ **なかなか書けないですよ：**

→184 かな う：ん 美術史はもうはじまっているんですか卒論のが

⑥ 応答詞・相づちのみ

応答詞・相づちのみは、日本語では、「はい」「うん」「そう(です)(ね)」「そうなんですか」「確かに」、中国語では、「对」「嗯」「是(呀/啊)」などの応答詞・相づちのみが見られる場合を指す。このパターンでは、用いる相づちによって、相手の同意要求発話を受容しただけで、同意か否定かはっきりしないものも含む(小宮1986, 藤原1993)。したがって、このパターンでは、応答発話者は最小限の応答をしてターンを相手に譲るだけであり、今回の6つのパターンの中では共感構築的要素が最も弱いパターンだと考えられる。

会話例7では、きょうこは修士課程を3年に延ばす人が多いという認識を「でも多いですよね修士課程そうされる方」と発話した(115)。この発話の趣旨は修士課程が発話された時点で相手せいこに伝わり、せいこからゆっくり延ばした応答「うん」がみられた(116)。

会話例7

115 きょうこ あ：そうなんですか **でも多いですよね修士課程[そうされる方]**

→116 せいこ [う：ん]

117 きょうこ うんうんうん

4.1.2 「同意要求―応答」のパターンの出現傾向

中国語母語場面と日本語母語場面、中日接触場面の「同意要求―応答」の連鎖のパターンの出現傾向を量的に分析した結果、まず「同意要求―応答」の出現数に大きな違いがみられた。

中国語母語場面 18 組の会話には、同意要求の発話は 17 回出現したのに対し、日本語母語場面では 106 回（うち 6 回は相手のほめへの否定など不賛同の応答）であった。一方、接触場面では、計 29 の同意要求発話がみられ、うち中国人学習者によるものは 11（うち 3 回はほめへの否定など不賛同の応答）であり、日本語母語話者によるものは 18（うち 1 回はほめへの否定である不賛同の応答）である。

これらの結果から、日本語母語場面と比べ、中国語母語場面では、同意要求発話の生起数が非常に少ないことが明らかになった。また、中日接触場面でも同意要求の生起数が少ないこと、なかでも中国人学習者の同意要求が少ないことが明らかになった。

相手の同意要求に対して、4.1.1 で示した 6 つのパターンの出現傾向を分析した結果を表 1 に示す。中国語母語場面では、主に②情報・意見の提供、⑥応答詞・相づちのみという 2 つのパターンに集中している。また、①先取り・共話と③類似した同意要求、⑤情報要求は出現しなかった。一方の日本語母語場面では、主に②情報・意見の提供と④語彙・表現等の繰り返しに集中していることがわかる。中国語母語場面では 5 割近く占める⑥応答詞・相づちのみは 2 割弱にすぎない。また、中日接触場面では、中国人学習者の同意要求に対し、日本語母語話者は主に②情報・評価の提供（63%）で応答しているが、日本語母語話者の同意要求に対しては、中国人学習者は主に⑥応答詞・相づちのみ（47%）で応答している。

表 1 「同意要求—応答」のパターンの出現傾向

	中国語母語場面		日本語母語場面		中日接触場面			
					中—日		日—中	
① 先取り・共話	0	(0%)	3	(3%)	0	(0%)	0	(0%)
② 情報・評価の提供	8	(47%)	35	(35%)	5	(63%)	5	(29%)
③ 類似した同意要求	0	(0%)	9	(9%)	0	(0%)	0	(0%)
④ 語彙・表現等の繰り返し	1	(6%)	29	(29%)	1	(13%)	4	(24%)
⑤ 情報要求	0	(0%)	5	(5%)	0	(0%)	0	(0%)
⑥ 応答詞・相づちのみ	8	(47%)	19	(19%)	2	(25%)	8	(47%)
計	17	(100%)	100	(100%)	8	(100%)	17	(100%)

4.2 考察

以上の結果を踏まえ、以下ではまず中、日母語場面の「同意要求—応答」の連鎖の特徴の相違を述べ、次に接触場面の特徴、とくに中国人学習者の応答の仕方および問題点を考察する。

4.2.1 中、日母語場面の相違

中国語母語場面では、同意要求発話は、18 組の会話に 17 回しかみられず、20 分の会話に平均 1 回弱という極めて低い生起頻度である。それに対して、日本語母語場面では、100 回以上生起

し、平均にして1組の会話に5回以上みられる。これらの結果から、同意要求発話の生起頻度は、中、日間で大きな差がみられた。

楊(2007, 2011b)では、中国語母語場面の初対面会話では、会話の参加者が速いテンポでより多くの情報交換をして会話を展開していくという特徴を指摘しているが、本研究の結果から、中国語母語話者が意見や評価を述べる際に同意要求の形を取らずに述べることで会話がより速く展開していくことが推察され、そのため同意要求の発話が生起しにくいということが考えられる。一方の日本語母語場面では、初対面の人間関係に配慮して、お互いの意向を窺いあいながら会話を展開していく(楊 2007)側面があり、意見や評価を述べる際も断定的にならずに相手の同意や共感を得ながら述べるということが考えられよう。

また、応答の仕方をみると、中国語母語話者は、同意要求を受容して相づちを打ち、ターンを相手に返すか、積極的に情報、意見を付加して、会話を前に進めるか、のどちらかに集中している。

会話例8では、王と張は資格試験について話している。王の同意要求発話(213)に対して、張は「嗯」と相づちのみで応答した(214)。それを受け、王はさらに意見を述べ続ける(215)。

会話例8

【日本語訳】

- | | | | |
|------|---|----------------------------------|---|
| 213 | 王 | 对呀 等于说如果合格证明嘛
你60分和90分也一样的对吧? | そうよ つまりもし合格証明書だけだったら
60点も90点も同じこと そうですね? |
| →214 | 張 | 嗯 | うん |
| 215 | 王 | 如果按分数的话 当然越低就
越差 | もし点数を出すのなら 当然低ければ低い
ほど悪くなります |

また、会話例9では、李と陳がほかの専攻の話をしており、李はその専攻の勉強が厳しいとの推測的意見を「吧」を付加して述べている(201)。それに対して、陳は「確かに厳しい」と肯定してすぐそう判断する根拠となる情報の提供を行う(202)。

会話例9

【日本語訳】

- | | | | |
|------|---|--|---|
| 201 | 李 | 哦他们那个应该挺苦的吧 | あ：彼らの勉強は結構厳しいでしょう |
| →202 | 陳 | 是挺苦 而且他们的老师好像
讲的特别快然后一节课有好多
好多 而且他们又难嘛 | 確かに厳しいです しかも彼らの授業のペース
が非常に速いようすし 1回の授業の内容も
多いし しかも難しいんですよ |

日本語母語話者は、②情報・評価の提供が最も多かったが、中国語母語場面より多くのバリエーションがみられた。同意要求の発話内容によって、④語彙・表現等の繰り返しや、③類似した同意要求、①先取り・共話などで、積極的に共感を示している。ここで注目したいのは、中国語母語場面では⑥応答詞・相づちのみの割合（47%）は、日本語母語場面の④語彙・表現等の繰り返し（29%）と⑥応答詞・相づちのみ（19%）の合計（48%）にほぼ相当することである。すなわち、内容によって新たな情報・意見を追加しない割合は中、日ではほぼ同率であるが、日本語母語場面では、それらは、応答詞・相づちのみではなく、主に語彙・表現等の繰り返して応答している。4.1.1 で述べたように、肯定か否定かはっきりしない応答詞・相づちのみと比べ、語彙・表現等の繰り返しは相手の意見要求に積極的に理解と共感を示すものであり、ここで中、日母語場面の違いがみられたといえよう。

会話例 10 では、ふみとかなは忙しかった後は休みたくなるという話をしている。かなが「なんか休みたくなっちゃうよね」（274）と同意要求をし、ふみは「休みたい」「よね」などかなの発話にあった語彙や表現を用いて共通の感覚や感想を持つことを示す。そこで、かなが「何もしたくないですね」とパラフレーズして「休みたくなる」気持ちを強調して、さらに共感を誘う発話をする（276）。ふみも「そう」と肯定し、今度は具体的に先生も同じような雰囲気になると情報を追加する（277）。ここでは、ふみがかなの発話を繰り返すことで二人は同じ認識・感想を持っていることが確認・共有され、それによって、かなの次の同意要求発話（276）を引き出し、より長い「同意要求一応答」の連鎖がみられた。

会話例10

- 273 ふみ やっぱり夏 今から夏までの間にすごい遊びたくて：
 274 かな あ でも忙しくて [それが片付いた後ってなんか休みたくなっ [ちやうよね
 →275 ふみ [あ： [休みたいす
 よね
 276 かな ん：何もしたくないですね
 →277 ふみ そう 先生も題目出して卒論の準備をしろよ みたいなそういう雰囲気になっ
 てて：

4.2.2 中国人学習者の「同意要求一応答」の特徴

前掲の表 1 で示したとおり、接触場面では、中国人学習者の同意要求発話は日本語母語話者の半数以下で、同意要求発話そのものの生起頻度が低いことは中国語母語場面に共通していることが明らかになった。

また、応答の仕方をみると、中国人学習者の応答のパターンは⑥応答詞・相づちのみに集中しており、中国語母語の影響が示唆される。以下では中国語母語場面の会話にみられる⑥応答詞・相づちのみの会話例を挙げながら考察する。

会話例 11 と会話例 12 では、同意要求に対して、それぞれ「对」「嗯」と 1 語のみの応答がみられ、聞き手はあくまでも話し手の同意要求の発話の受け入れを示しただけで、話し手の認識に積極的に共感を示す様子はみられない。

会話例 11⁴

【日本語訳】

302 C31 肯定主要是成绩 你想别的有什么呀 别的咱们又不缺又没有做什么什么是不是？

きつと主に成績で（決めると思う）ほかに何かあるか考えてごらん 私たちには特に欠けているものはないし また何かしたということもないし そうでしょう？

→303 C32 对

そう（です）

会話例 12（前掲会話例 8 の一部）

【日本語訳】

213 王 对呀 等于说如果合格证明嘛 你60分和90分也一样的 对吧？

そうよ つまりもし合格証明書だけだったら 60点も90点も同じこと そうでしょう？

→214 張 嗯

うん

次に中日接触場面の会話例を見ながら接触場面の中国人学習者の応答を考察する。会話例 13 は、中国人学習者による「うん」のみの応答がみられた例である。ここでは、まず日本で法律を学んでいた鈴木は自分の専攻である法律は難しいと述べている（715）。それに対して、王は「内容がいっぱい」と理由を提示しながら賛成を示している（716）。それを受け、鈴木は「いっぱい」と王の発話の一部を繰り返して、さらに「解釈によって変わってくるでしょう？」と難しいと思われる理由を追加し、「でしょう？」で同意要求をした（717）。ここまでの「法律は難しい、内容がいっぱい」においては、鈴木と王はそれぞれ新しい意見を追加し、お互いの発話を繰り返しながら、法律に関する意見・感覚を共有してきた。そして鈴木はさらにもう一つの理由「解釈によって変わってくる」ことについても王との共通認識を作ろうと同意要求をした。しかし、ここでは、王は「うん」と相づちを打つのみであった（718）。その次も王から「うん」しか見られず、最終的にはこのシークエンスは鈴木の笑いで終わる。

会話例 13

715 鈴木 でも難しい法律 [って

716 王 [うん難しい 内容がいつ [ぱい うん

4 本研究では、中国語の応答詞・相づちは「嗯」「对」「是」の順にスピーチレベルが高くなると考え、日本語訳をそれぞれ「うん」「そう（です）」「はいそうです」と訳す。

717 鈴木

[いっぱい 解釈によって変わっ

てくるでしょう？

→718 王 うん

719 鈴木 法律って

720 王 うん

721 細木 hhhh

会話例13では、王が「中国語」で同意を示す「嗯」と同じように「うん」を発話したことが考えられる一方、「解釈によって変わってくる」の意味がわからずにとりあえず「うん」と言った可能性も考えられる。すなわち日本語能力による制約で、共感を構築していく場面にうまく対応できなかったことも考えられる。

次の会話例 14 は、田中と張が料理の話をしている場面である。田中は「お母さんの料理が食べたくになりますよね」と同意要求の発話をした (491)。それに対して、張は「はいそうです」と同意を示した。ここでは、同じく家を離れて寮生活を送っている者同士として、田中は二人に共通した感覚や気持ちを見込み、それに訴えようとしていることが推測される。日本語母語話者同士なら、「(お母さんの料理が) 食べたいね」「食べたいよね」と繰り返し等で盛り上がる場面だが、会話例 14 では、相づちのやり取りだけで連鎖が続くことなくこの話題は終わる。ここでは、料理が話題となっており、使われている語彙も初級レベルのものであるため、相手の日本語が聞き取れないなど日本語能力の制約によるものだとは考えにくいと思われる。

会話例 14

491 田中 うんうん食べたくなる あ：お母さんの料理が食べたくになりますよね：

→492 張 あはいそうです

493 田中 う：：ん

中国人学習者の応答発話において次に多かったのは、②情報・評価の提供と④語彙・表現等の繰り返しである。②情報・評価の提供は、中国語母語場面、日本語母語場面に共通して多くみられ、会話を先に進めるもっとも基本的な方法であるが、接触場面ではそれほど多くみられなかったのは、中国人学習者にとって、相手の発話に応じて、適切に情報や評価を提供するのは場合によってはハードルが高いためではないかと推察される。そういった意味で、④語彙・表現等の繰り返しは、相手が用いた語彙や表現、または相手の発話そのものを繰り返すもので、日本語能力による制約を比較的受けにくいものである。ところが、日本語母語場面で多くみられた④語彙・表現等の繰り返しは学習者にはそれほど多くみられなかった。前述したように、中国語母語場面において④語彙・表現等の繰り返しの応答パターンの占める割合が低いのは、繰り返しは会話を前に進める力が弱く、中国語母語場面では②情報・評価の提供の発話をして

会話を進めることが優先されるためであると考えられる。接触場面での中国人学習者が日本語能力による制約を受けにくい語彙・表現等の繰り返しをそれほど用いないのは、こうした中国語母語場面での会話のスタイルの影響を受けていると推察される。

以上で論じてきたように、日本語を用いる接触場面では、中国人学習者が相手の同意要求発言を受け、日本語能力による制約から情報・評価の提供をすぐにできない場合、語彙・表現等の繰り返しをするのは、相手に共感を表明しながら、相手との一体感を作り出す場面をより多く作り出すことができる有効な方法であることが明らかである。そこで、本研究では、日本語教育における会話指導を考える際に、日本語母語場面における共感構築のプロセスや、会話の展開の仕方に関する中、日間の相違を提示したうえで、学習者の日本語能力の制限を比較的受けにくい「語彙・表現等の繰り返し」を積極的に使用するよう指導することを提言したいと思う。

5. おわりに

本研究は、中、日母語場面および日本語による中日接触場面の2者間の初対面会話における「同意要求一応答」の連鎖の分析を行った。その結果、同意要求に対する応答には、①先取り・共話、②情報・評価の提供、③類似した同意要求、④語彙・表現等の繰り返し、⑤情報要求、⑥応答詞・相づちのみ、という6つ応答のパターンがみられた。中国語母語場面と日本語母語場面を比較した結果、日本語母語場面では会話の内容に応じて様々な応答のパターンが見られたのに対し、中国語母語場面では、同意要求発言そのものが少なく、また応答のパリエーションも少なく、②情報・意見の提供と⑥応答詞・相づちのみに集中していることがわかり、情報交換的側面が強い中国語母語場面は、話を進めることを優先する会話展開であることが明らかになった。一方で、中国人日本語学習者が参加する接触場面においては、学習者の応答には、積極的に共感を示す応答が少なく、応答のパターンは⑥応答詞・相づちのみに集中し、共感構築的側面の少ない会話展開となっていることが明らかになった。また、学習者の応答には日本語能力の制約が影響しているほかに、中国語母語の影響を受けていることが示唆された。

初対面の会話において、お互いに関する情報や共通の経験が少なく、「聞き手も自分と同様な認識ができるという肯定的な見込み」（蓮沼 1995）が立ちにくいいため、同意要求の発言は相手から肯定的な応答が得られないリスクを伴う。しかし本研究の結果から、日本語母語場面の初対面会話では、会話の参加者は、相手との共通認識の喚起や確認を通して、相手から共感を引出し、または共感を積極的に示すことにより、距離を縮め、会話の共感構築的側面を促進しながら会話に参加しているという特徴がみられた。そこで、筆者は日本語学習者への会話の教育を考える際に、学習者には、情報交換的側面を重視する中国語母語場面の会話と共感構築的側面も重視される日本語母語場面の会話との違いを提示し理解させたいと、日本語能力による制約を受けながらも、相手の同意要求発言に効果的に共感を示す指導方法の提案を試みた。

本研究では、共感構築の観点から、中、日母語場面の「同意要求一応答」の連鎖を分析し、

両場面の特徴の相違を明らかにしたうえで、中上級で中国で日本語を学ぶ学習者を対象とした接触場面の分析を行った。今後は上級または超級の学習者や日本に滞在している中国人学習者等、日本語能力が異なる学習者を対象として研究を行い、学習者の日本語能力と共感構築的会話能力との相関を解明し、日本語能力に応じた指導の提案を試みたいと思う。

会話例の文字化規則

発話者の前の数字は会話冒頭からのターンの通し番号である。発話者はすべて仮名で示す。あみ掛けは同意要求の発話を示し、→は応答のターンを示す。その他の文字化規則は以下の通りである。スペースは発話をわかりやすく示すために入れたもので、間を意味しない。

h 笑い等吐息を示す。h の数は笑い等の長さを示す。

[重なりを示す。

? 語尾が上がっていることを示す。中国語では、疑問文であることを示す。

: 音の引き伸ばしを示す。: の数は音の相対的長さを示す。

= 直後/直前の発話との間に間がないことを示す。

(文字) は日本語訳にわかりやすくするために補足する部分である。

【文字】は必要に応じて会話例に説明を加える部分である。

参考文献

- 王志英 (1999) 中国語の語気助詞の伝達機能 『中国語研究』 41, pp. 8-17.
- 木村英樹・森山卓郎 (1991) 聞き手情報配慮と文末形式 『日本語と中国語の対照研究 (下)』 くろしお出版, pp. 3-43.
- 小宮千鶴子 (1986) 相づち使用の実態—出現傾向とその周辺 『語学教育研究論叢』 3, pp. 43-62.
- 胡明扬 (1981) 北京話の語気助詞和叹詞 上 『中国語文』 5 商务印书馆 (于康・张勤編 (2000) 『語気詞と語気』 好文出版 pp. 49-82).
- 呉紅哲 (2002) 「だろう」と「吧」の確認要求用法の比較 『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』 13, pp. 69-81.
- 黄琬婷 (2009) 中国語の語気助詞“吧”に関する一考察—確認要求機能を中心に— 『大阪大学言語文化学』 18, 29-40.
- 佐々木泰子 (2006) 「物語の相互行為的分析」 『社会言語科学会第 18 回大会発表 論文集』, pp. 52-55.
- 佐々木泰子 (2010) 接触場面と母語場面—体験談の終結部から見たその特徴 『言語文化と日本語教育』 39, pp. 33-40.
- 邵敬敏 (1999) 汉语語法の立体研究 商务印书馆.
- 鈴木洋子 (2004) 確認を要求する日本語応答期待文の文末形式とその機能—母語話者と学習者

- の使用から—『応用言語学研究』 pp. 6, 249-261.
- 田中妙子 (2001) 会話における共感表明発話『日本語と日本語教育』(30), pp. 51-60.
- 張恵芳 (2008) 「推量確認要求」用法の日中対照研究—情報伝達・語用論的な観点から『言語学論叢 オンライン版』(創刊号(通巻 27 号)): pp. 103-114.
- 蓮沼昭子 (1995) 対話における確認行為—「だろう」「じゃないか」「よね」の確認用法『複文の研究(下)』くろしお出版, pp. 389-419.
- 藤原真理 (1993) 対話における相づち表現の考察「そうですか」「そうですね」等を中心に『東北大学文学部日本語学科論集』3, pp. 71-82.
- 宮崎和人 (2001) 認識のモダリティとしての<疑い>—「ダロウカ」と「ノデハナイカ」—『国語学』52 (3), pp.15-29.
- 宮崎和人 (2002) 確認要求 宮崎和人・ほか編『新日本語文法選書 4 モダリティ』くろしお出版 pp. 174-202.
- 楊虹 (2007) 中日母語場面の話題転換の比較—話題終了のプロセスに着目して—『世界の日本語教育 日本語教育論集』7, pp. 37-52.
- 楊虹 (2011a) 初対面会話における「質問」の談話進行上の機能—中国語母語場面と日本語母語場面を比較して—『社会言語科学会第 27 回研究大会予稿集』 pp. 42-45.
- 楊虹 (2011b) 中日母語場面の初対面会話における話題開始の比較：参加者間の相互行為に注目して『立命館言語文化研究』22 (3), pp. 185-200.
- 劉雅静 (2009) 否定疑問形「デハナイカ」の用法・機能について—中国語の“不是……吗?”との比較を通して—『日中言語研究と日本語教育』2, pp. 74-83.

